



海を渡った名投手田中将大さんが、高校を卒業して楽天イーグルスに入団した初めての休日に、「休みくらい自分の好きにしたい」と発言し、「それではいけない」と当時の野村克也監督がぼやいたのが記憶に残っています。オンとオフの区別をすることが時代の流れですが、修行開始早々に仕事と休みをきっちり区別するようでは、仕事が単なる生活の手段、生業（なりわい）に落ちてしまいます。人間が出来上がらないと、仕事の質もなかなか期待値以上に良くなってはいかないのが一般的です。オフにはオフなりに、スポーツ人としてのオーラを維持できるように精神を修練せよというのが、野村監督のお考えだったのかと想像いたします。

確かにこれまで医師の成長を多々見てきた経験から、臨床医もスタートの2年間の研修期間をどのように過ごしたかで、生涯の診療態度が決まってしまうように思えます。修行のし始めから和を大切に、ヒトのやりたがらない仕事まで受けて苦労を重ねた医師は、研修が終了しても心配りが利き、患者を思いやり、辛い場面から逃げることをない頼れる存在になっています。逆に何事にも批判的で、自分の好む仕事だけに終始した医師は、身体を動かすことを疎い、自ら損な立場を引き受けることが出来ず、理屈ばかり並べたてる診療になりがちなのが致します。最初が肝心、鉄は熱い内に打て、若い時の苦労は買ってでもせよ等々、表現は異なっても人間形成という観点からは、いずれも同じような意味合いの言葉なのだと思います。

ところが、最近では西洋の合理主義が台頭してきたためか、人間形成よりもその道の専門技術の習得ばかりに焦ってしまう傾向があるように思えます。もちろん専門技術が伴わない専門家は存在しないのであり、それらの技術が必要なことは十分に理解します。しかし一方で人間形成が手薄になった結果、例えば頼んだことしかしてくれないとか、頼んだことすら満足できる内容ではないなどと感じる場面が増えてきたように思います。自分の立ち位置において、求められる仕事を完璧にこなすという責任ある姿勢、自ら納得できるような要求水準以上の仕事を行うという専門家としての誇りなど、自分と勝負するというかつての日本人特有の生真面目さが薄れてきているように感じるので。

かつての日本には、丁稚（でっち）制度というものがあつたと聞きます。丁稚とは商店に就職して、住み込みで使い走りなどの雑務をこなす小僧たちを指しています。彼らはそのような制度の中で奉公し、礼儀作法や商いに必要な技術を段階的に身に付けていきました。当然基本技術を身に付けている中で、その職業に見合った人間性は構築されていったことと思います。この制度は生活全般は保障されているものの、給与のない労働という点で理想的な労働形態とは言えず、労働法規が整うにつれて消滅したようです。しかし教育の順番という点では、商人にふさわしい人間性を作り上げていくシステムとして、機能していたのではないのでしょうか。現代ではたとえば掃除のような業務は雑務であって、専門技術の習得と全く関係なしと安易に断定するような教育がなされているように思います。技術だけが先行し人間形成をおろそかにしてしまうと、うわべは取り繕えてもいざというときに責任逃れをするなど、はしたない態度が表出してくることになります。日本の文化の中で合理主義を前面に出し過ぎると、目先の技術は向上しても人物が育ちにくいと、長期的には破綻につながるのではないかと憂えます。

田中将大投手は野球界を代表する名投手に成長しました。しかしそれは、何も野球技術だけが研ぎ澄まされた結果ではないと考えます。私の年齢になってくると、若者の顔つきが変わってくることに気づくことがあります。田中投手の顔貌は、入団したての高校球児の甘えた顔つきから、球界を背負って立つという責任を抱えた顔貌に明らかに変わりました。それは彼の内面が変わったことの証です。つまり生涯にわたって必要とされる技とは、この内面の変化に伴って身についてくる技術なのです。内面の変化とは、好まざる物事に対しても真摯に向き合える真面目さと忍耐力、換言すれば人間力とも言えます。専門的な技術力は、ある特定の場面にはしか対応できない限定的な能力です。一方その根本に存在する人間力はどのような場面、すなわちどの職種においても対応可能な万能型です。社会の常として人間が出来上がれば専門技術は自ずから付いてきます。しかし、その逆は見たことがありません。人間形成と技術習得の順番を誤ると、仮に社会的地位は得られたとしても、お粗末な人物として生涯を過ごすことになるように思います。